

綴音・つづれおと (第三話)

株式会社アモネット 代表 有田真一郎

赤ちゃんは生まれてくるまで約十ヶ月間お母さんのお腹の中で育ちます。安らぎに包まれて、安心して過ごすのでしょ。母親のお腹の中にいた頃の記憶はほとんどの人がなくしてしましますが、母親のお腹の中で胎児はその心音をどういう状態で聞いているのでしょうか？

母親の心音はどういう周波数で、どんなメロディで、拍数はどれくらいなんだろうか？それを研究している方がいて、それを電子的に作って再生したわけです。たしかに偏った音で、われわれ大人にはノイズにしか聞こえませんでした。それを赤ちゃんは本当に安らぎの音として聞くようです。

まあ、はかりようはありませんが・・・。

それから、もう一つは " $1 / f$ ゆらぎ

「ゆらぎ理論」というのがありますが、私の知ってる範疇ではこのゆらぎ理論は電気こたつの開発者が山の中でひらめいたそうです。ある日、ヘッドホンで山の中の騒音を聞いていたときに、ふと心が安らぐ感覚を感じ、この感覚は何だろうと聴こえてくる音に集中したそうです。

『ザーッザーッザザーッ』

という滝が流れ落ちる音の中に、たまに、

『ピュッピュッ』

と、ひばりの鳴き声が入ってくる。すると滝の水音が一瞬ちょっとだけ変化する。

つまりその変化を彼は、

音が一瞬「ゆらいだ」

と、感じたんです。

では、どの程度ゆらいだら人間が一番心地いいと感じるのか？

その心地良さの尺度として、脳波を測定し、 α 波・ β 波がどれくらいでているかを調べました。そしたらある周波数分の1だったそうです。

つまり $1 / f$ 。なるほどねえ。

こたつが人間の皮膚に与える温度が、一定のままだったらある温度のところから、

「あっちっち！熱い、熱い！」

なんてことになってしまいますよね。でも、このゆらぎ理論を応用して、ある温度をゆらがせることにより、すごく心地いい暖かさをつくることができましたのです。

これが 1 / f ゆらぎの出発点です。

それで今度は音響屋さんたちが、1 / f ゆらぎでいろいろなものを作り始めましたが、今だかつてそれが一般大衆化してないということは、音の場合はどうも「そういうこともあるよね」ぐらいのところにとどまっているのではないのでしょうか。ただ単に音量をゆるがせたらいいのかって話ではないし、メロディの中にある違った音を入れるとそうなるのかっていうことでもないんです。

ある研究者は、モーツァルトは直感的にそのことを感じとって一定の「ゆらぎ」を持って作曲していたと言います。だからモーツァルトの曲はとても心地いいと言いますが、それは定かではありません。モーツァルトの曲は、非常に短い時間の中でゆらぐ。本当に一秒の中でゆらぐ・・・。あるいは十分の曲の中でゆらぐ・・・。そういうことも、彼には感

覚としてあったのではないかと私も思います。

「ゆらぐ」というのは大きく分けて、「大きくゆらぐ」時と「小さくゆらぐ」時があるんじゃないかと思えます。

じゃあ、オーディオからでてきた音は本当にまったくゆらいでないかっていうと実はそうではなくて、そこら辺はやっぱり音の設計者として考えなければいけないところだと思いますが、空気中には風の通り道があると思うんです。個人住宅の中でもそうですし、喫茶店などでも、入口と奥の方は違う空気の流れがあると思うんです。その「風をよむ」なんてたいそうなことは言いませんが、私は直感的にそういうものがあると感じているので、「あっ。ここから風がぬけていく。」

と感じたら、風がぬけていく大もとのところにスピーカを置けば、あるポイント、ポイント、ポイントで音を聞いたときにあたかもゆらいでいるように聞こえるんです。

もっと顕著な例をあげると、リビングに置いてあるオーディオでお気に入りのジャズのCDをかけ、窓をあけて、庭で植木の手入れをしていたとします。ぽかぽか暖かい休日の午後です。久しぶりにリラックスした気分です。土いじりをしていたとき、後ろを涼しげな風が吹

きぬけていきました。その瞬間、いつも聴いてるお気に入りの曲がいつもと違ったゆらぎで聞こえてきました。でもこれは意図したことなく、自然のいたずらと言えます。

しかし、われわれが風の通り道ということのを頭に置いて音をデザインをすることによって、いつもと同じ音を再生してもまったく違った心地いい風景を作ることができるのです。

もちろん音の設計をする音屋としては、いわゆるスピーカからでてきた音がどんな周波数成分で、どれくらいの大きさで、どこの範囲まで、どれくらいの音圧でとどくかというの、最低限やらなければいけないことですが、その次に音を聴く、楽しむということを考えてきたときに、

「ここで聞くとちょっと気持ちいいよね」

という風の通り道が頭に浮かぶんです。

たとえば冬に暖房をつけると暖かい空気は上へ、冷たい空気は下にいきますよね。奥の方には暖かい空気が溜まっている感じがします。そしてだれかが部屋に入ってきたとき、空気がフーッと動く。そのとき微妙に音の流れも変わるんです。口では言い表せないほどわずかですが、人間の体として、耳として知覚はそれをきちんと理解しているんです。そういうことも含めて何かを設計していくということを、たぶんわれわれは直感的にやっているん

だと思えます。

今求められているのは、非常に心地いいハイセンスなBGMが自分の体を包んでくれるような音の環境だと思えます。体を優しく包んでくれているものにとげとげしい針なんかあっちゃいけないんです。それは絹のカーテンがときどき風に吹かれて腕をサラッとなでてゆくような感じ。本来、人として音を楽しむというのはそういうことじゃないでしょうか？

それは環境としての音ということですよ。それをあえて作ろうとしたら演出になってしまいます。これはとっても大事なことです。私には考えます。

実はこれを実践したのが神戸のある物件。左側にデパートがあって、右側にはスーパーマーケット。その真ん中に高さ20メートル・長さ500メートルぐらいの建物があって、その中央通路です。

私はお客様をおもてなしするような音環境を作りたいと考えました。天井からは降りそそぐように、真ん中ぐらいからは海の中をただよっているような感じに、下の方からは地球からわき上がってくるような音。この三つの環境の違う音を、文字通り

スピーカの高さと通路を三つのゾーンに分けることで表現しました。風の通り道を考えながらの試みでしたが、ある意味成功し、ある意味失敗したんです。実は通路に、いろいろな音がでるものがいっぱい置かれてしまったんです。そうです。たくさんのお店がラジカセでジャンジャカ、ジャンジャカやっちゃって、結果「あれ一つ」ということになってしまいました。

しかし、風の通り道の読みは当たり、イメージどおりの音環境を作ることができたという部分では大成功と言えると思います。

今まで私たちは「聴こえてくる風景」、つまり「音の風景」という考え方をもちながらやってきましたが、もしかしたらわれわれプロはそれをもっと風景化する手法を持たなければならぬのではないのでしょうか？

風景化する手法というのはやっぱりイメージしている音のある記号として表し、「こんな感じですよ」

というふうに表示できることじゃないかなと思います。それにはどうしても最低限の音楽の知識というものが必要になってくるのではないのでしょうか？

私はついこないだまで、そういうものは自分にはまったく必要ないと思っていました。あ

る意味哲学的な、あるいは理念的な、観念的な、そういうものがあって、そして自分がどう感じたかを言葉で表したら、それで通じると考えていましたが、どうもそうではないようです。

自分がサククスを手にして、いま鳴らした音が何の音なのか。ドレミの中でもドのシャープなのか、シのフラットなのか・・・。

わけわかんない！

たしかに全体の流れはわかってる。でも、それじゃあダメでしょ！

自分が、お客様に音を提案するプロとして、それぐらい知っておかなければならないことじゃないかと思うようになったんです。

たとえば、船の汽笛の音が砂浜のむこうから聞こえてきたとします。

「今現在の騒音がこれくらいだから、あの船の汽笛の音はBフラットだ。Bフラットの音が断続的に鳴っている。そうか。こういう環境の中ではBフラットの音はこんなふうに聞こえるんだ。」

と理解した方が、すごく単純でわかりやすいと思います。でもこれは、作曲の勉強をした人やプロの音楽家とか限られた人にしかできないということになってしまうのです。

ということ、もっともっと音というのを記譜化していく。まあ、それが世界共通の言葉
で言えば「楽譜」なのでしょ。各国によって表記は微妙に異なるでしょうが、そうい
うことを身に付け、「この音はこうだよ」っていう聴能を鍛えることが大事になってき
ます。

聴能というのは、聞き分ける能力のことです。同時に聞き分けた音を記号に表す能力も育
てなければなりません。しかし記号に表す能力はちょっと置いておいて、まず聞く能力
(聴能)をわれわれはもっと育てていく必要があります。しかし大人の耳にはフィルター
がかかってしまっていて、

「聞く耳持たん！」

という方も多く、それをこじあけるのは大変なことです。
ですから、まだやわらかい子どもたちの聴能を形成していきながら、最終的に記号に表せ
られるようになればいいと思います。しかし、われわれは音楽家ではないので、まず聴能
を鍛えて、育てるところから始めたいと思います。

だってふつう船の汽笛を音として聞いたとき、EなのかEフラットなのかわかりません。

ところがふだんEの音を聞いていたら、

「あっ、これはいつも聞いているミの音よりちょっと低い。レの音よりちょっと高い。とい

うことはEフラットの近くの音だ。」

ここまでいければ最高ですが、何度も言うようにこれは音楽大学、しかも専門の学部でしか学べないから、もっともっと手軽に“聴能”っていうのを遊び感覚で学べる場が必要だと考えます。

小川のせせらぎの音が聞こえてきた。じゃあ、小川のせせらぎってどんな音？

『シャバシャバ』『サーサー』『チョロチョロ』『サラサラ』・・・。

まずは言葉で表現できるようにし、それを別の方法で再現してみましよう。これを擬音語化と言いますが、小川のせせらぎの『サラサラ』をどうしたら再現できるでしょうか？

新聞紙を『ビリビリ』と破いて手で『クシャクシャ』って丸めてみたとき、

「あっ、この音だ！」

というふうになるかもしれません。その音を再現できることで、より鮮明にその音が頭の中に残り、同じ場所に行ったとき、今度は目をつぶってその音をさがせるようになりそうです。

「あれ？今日はあの音が聞こえないけど、どうしたんだろう。」

時には、こんなこともあるかもしれません。目をあけてみたら、実は小川の真ん中に大きな石が乗っかっちゃって、この前聞いたサラサラがなくなっちゃった！

それを「淋しい」と思うか、

「今日は『ジャブン、ジャブン』が聞こえる！」

と、そこでまた新しい音を発見するのか。そうして自分の聴能を形成してゆく。でもその

人の頭の中には、きっと『サラサラ』っていう音が、いつまでも残っているはずです。

サラサラ流れる小川の情景とともに、いつでも思い出すことができる・・・。

(第四話 へつづく)